



TITLE:

Khanakammakaan chamra prawatsaat thai
Khanakammakaan catphim eekasaan
thaang prawatsaat watthanatham lae
booraannakhadii, Thalaeng ngaan
prawatsaat eekasaan boorannakhadii, Vol. I,
No. 1&2. Bangkok, 1967

AUTHOR(S):

桂, 満希郎

CITATION:

桂, 満希郎. Khanakammakaan chamra prawatsaat thai Khanakammakaan catphim eekasaan thaang prawatsaat watthanatham lae booraannakhadii, Thalaeng ngaan prawatsaat eekasaan boorannakhadii, Vol. I, No. 1&2. Bangkok, 1967. 東南アジア研究 1967, 5(3): 653-654

ISSUE DATE:

1967-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55414>

RIGHT:

みれば、雲南、ビルマ、タイ国北部という著者の歩いてきたコースは、現在の北タイの山地民のほとんどがたどってきたコースと同じだと言える。

現代タイ国では、本当に山地民の生活や性格を残している山地民を探すのは車で行ける所ではもう不可能になりつつあると思われるが、本書に描かれた山地民の村は、すべて徒歩で何日もかかる所ばかりで、まだ平地民の影響を受けて生気をぬかれていない Lahu-na 族、Lahu-nyi 族等が対象になっている。

最後の1章、Beyond the Spirit Gates はアカ族の村に関するものであるが、これも現代のようにわれわれになじみ深いものとなる以前のアカ族を描いたものである。わたくしはアカ族の村に家を建てて住んだことがあるが、本書に描かれているような村へ行くには、わたくしのいた村から3泊4日もかけて歩かなければならなかった。本書が扱っている地域は、北タイの主なる山岳地帯をほとんど全部カバーしている。Lahu-na 族の他に、Lahu-nyi, Lahu-shi, Aka, KMT の兵隊、アヘンの密売団などの動き、動物の分布等が描かれていて、たいへん興味深い本である。

(桂満希郎)

Khanakammakaan chamra prawatsaat thai Khanakammakaan catphim eekasaan thaang prawatsaat watthanatham lae bo-oraannakhadii. *Thalaeng ngaan prawatsaat eekasaan boorannakhadii*, Vol. I, No. 1 & 2. Bangkok, 1967.

1963年に設立されたタイ国歴史(chamra)委員会の研究発表機関であり、4カ月に1回の出版物である。現在、上記の2冊のみが出ている。本書は単行本ではないので、この図書紹介に取り上げるにふさわしいかどうか疑問であるが、同委員会にはタイ国における歴史・考古学の代表的な人達はほとんどすべて含まれており、現在の研究の動向を知るうえで重要な出版物の一つにかぞえられるので、いま出ている最初の2冊のみを紹介しておく。報告の類は別にとすると、第1号には五つ、第2号には六つの論文が発

表されているが、そのうちで1号2号にわたって続くものは、(1)スパタラディット・ディッサクン：13世紀以前の東南アジアの状態について、(2)ローン・サヤーマーン：アユタヤ史、(3)セーンソーム・カセームシー：ラタナコーシン史である。ここでは、この三つを取り上げるにとどめておく。(1)は第1号において地理および風土に関する説明の後、この地域の先史時代の住民に関する論述、ついでインド文化の伝来とフーナンおよびタワラワディーまでを一気に説明し、第2号に入ってマレー半島およびインドネシア群島の西暦前より8世紀に至るまでの状態を説明したものであるが、本論文は未だ完結していない。(2)は第1号でいちおうアユタヤ王朝の変遷を記したのち、第2号では統治、社会および経済を論じており、当時の官僚制度や法律等がかなり詳しく述べられているが、色々な本からひろい集めてそれを並べなおしただけという感じがする。(3)も同様で、これといって新しいものはなく、文献を整理し直したもので、文字通り chamra という感じであるが、第2号のビルマ対タイの多数の戦争の記録は非常におもしろい。これらの論文の他にも、最近の調査の記録や碑文に関する研究発表などがあり、タイ国におけるタイ人の研究活動を知る上で重要な書物と言わねばならない。念のため、次の通り第1号と2号との目録をあげておく。

第1号

- (1) Col. Phraya Siiwisaanwaacaa：まえがき
- (2) Phraya Anumaan Raachathon：歴史および考古学について
- (3) M. C. Suphattharadit Ditsakun：13世紀以前の東南アジアの状態について
- (4) Chanthit Krasaesin：第4回委員会記録
- (5) Tri Amaattayakun：スコタイ王朝の古都調査
- (6) Roong Sayaamanon：アユタヤ史
- (7) M. R. W. Saengsoon Kaseemsii：ラタナコーシン史
- (8) Chanthit Krasaesin：歴史(chamra)委員会設立について
- (9) Prasoeet na Nakhoon：スコタイ時代の町の位置決定の方法について
- (10) Wilaatwong Noppharat：ムアング・ウー

トーンの記録

(11) 編集局：あとがき

第2号

- (1) Col. Phraya Siiwisaanwaacaa : 総理大臣の公務遂行について
- (2) M. C. Suphattharadit Ditsakun : 13世紀以前の東南アジアの状態について
- (3) Prasot na Nakhon : スコータイ 碑文研究報告
- (4) Khacoon Sukkhaphaanit : タイ史におけるヤソートンおよびアンコールトムについて
- (5) Roong Sayaamanon : アユタヤ史
- (6) M. R. W. Saengsoon Kaseemsii : ラタナコーシン史
- (7) Chanthit Krasaesin : Ngoen Kham Pawm について
- (8) Trii Amaattayakun : ピットにおける都跡調査
- (9) Chanthit Krasaesin : あとがき

(桂満希郎)

Kulaap Manlikamaat. *Khati chaoban*. Bangkok: Samakhom phaasaa lae nangsuu haeng prathet thai, B. E. 2509 (1966). v + 4 + 268 p.

Samakhom phaasaa lae nangsuu haeng prathet thai は国際 PEN クラブのタイ国支部であるうえに、1958年に設立されて以来、タイ語・タイ文学に関して出版・会合等をはじめとして様々な活動が続けてきているが、その他にも土着文芸 (wannakam doem) の研究をも目的としており、本書はその方面における研究成果として現われたもので、題名の *Khati chaoban* というのは “folklore” のタイ語訳に当てられている。全体は二つの部分にわかれ、第1部は *Khati chaoban* (folklore)、第2部は *nithan chaoban* (folktale) となっており、両者とも北は Chiang Rai から南は Nakhon Si Thammarat にいたるまでの各地域で著者自身が記録収集したものを集めている。

第1部では、folklore なるものの概念をヨーロ

ッパおよびアメリカで発達した方法論にもとづいて規定し、全部で13種類に分類し、それぞれの例が集められている。しかし、最初の説明の部分がやや不十分で、何にもとづいて本書の13種に分類したのかという点がはっきりしていないくらいがある。これに対して、第2部の folktale においては、その分類方法をかなり詳しく説明しているの、第1部よりずっと明瞭である。最初に地域による分類、形 (form) による分類、ついで Antti Aarne による Type Index および、Aarne-Thomson Types of Folktale について、その type index の例をあげながら説明する。最後に最も詳細な方法として Thompson による Motif Index of Folk Literature を説明し、その index の一部を例としてあげている。さらに実際に field で取材する場合の技術的方法を簡単にではあるがつけ加えていて、よくまとまったものとなっている。しかし、本書に集められた folktale の分類に用いられている方法は、index 方法ではなくて、形 (form) による分類である。これは本書に集められた folktale が合計38というあまり大きくない数を考えれば、もっともなことかもしれない。本書は folklore そのもの、あるいはその方法論を論じた研究書ではなく、各地で集めたものを一定の基準にもとづいて分類整理して提出した資料集と見るべきものである。

タイの folktale を集めた本は今までもかなり出ているが、主として地域別に収集したもので、内容的に見ると地名伝説から仏教本生譚に由来するものに至るまで雑然と1冊にまとめただけで、これといった明確な基準にしたがって分類整理したものは本書がはじめてではなかろうか。タイ国における folklore-folktale も地域によってはやがて間もなく消え去ろうとしているものもたくさんあるにちがいないが、また一方こういったものはいくら集めてもつきることのないものであるから、本書によって示されたような一定の方法で収集、分類、整理され記録されてゆくことが望まれる。この意味で、本書はその量はあまり多くないが、一つの手本、あるいは出発点となるものではなかろうか。

(桂満希郎)